研究

肢体不自由のある中学部生徒の自然災害への備えに関する認識

—特別支援学校3校に通学する子どもへの面接調査から—

小室 佳文¹⁾, 加藤 令子²⁾, 沼口知恵子³⁾, 西田 志穂²⁾

〔論文要旨〕

本研究の目的は、肢体不自由のある特別支援学校中学部生徒の自然災害への備えに関する認識を明らかにすることである。特別支援学校に通学する生徒7人に半構成的面接を実施し、逐語録を質的帰納的に分析した。結果、生徒たちは、自分で備えることや幼児後期から発達段階に合わせた備えが必要であると認識していた。また、大人に守られる立場から、段階的に備えながら自立して備えるという考えに変化していくことが明らかとなった。親と教員は、子どもが災害に備える能力を身につける必要があることを認識し、障がいの状態や移動方法に適した備えを子どもとともに検討する必要がある。さらに、家庭と学校だけでなく、通学時や受診時などの備えを関係機関と協力する必要性が示唆された。

Key words : 肢体不自由のある子ども, 中学生, 特別支援学校, 自然災害への備え, 子どもの認識

I. はじめに

障がいのある子どもは災害時に身体的・心理的なリスクが高まるため、多くの援助と配慮が必要である。しかし、障がいのある子どもと災害に関する研究は少数であること、また、海外においても身体的・心理的・教育的な視座を持つ社会学および教育心理学の専門職がまれにしか活動していないことが指摘されているように¹⁾、障がいのある子どもに関わる災害の備えは多くの課題があるといえる。災害発生時に身を守る行動をとることが困難な肢体不自由のある多くの子どもたちは、一日の大半を特別支援学校で過ごしている。災害が発生すれば、家族と再会するまでの避難中は子どもたちの身体的・心理的なニーズが適切に満たされる必要がある。従って、肢体不自由のある子どもが多く

通学する特別支援学校は、災害時の子どもの安全と安心に対する十分な備えが求められる。しかし、関係者は備えの必要性は認識しているが、組織的に体制を整えることや、日々の教育活動の中で「備え」を具体的に検討する難しさがあると考えられる。

特別支援学校の災害への備えに関して、特別支援学校の教員には「子どもの安全な避難への不安」があるが、学校の具体的な防災対策は不十分であることが明らかにされていた²⁾。著者らは、2009年に『特別支援学校用災害シミュレーションパッケージ』を開発し、教職員によるイメージトレーニングの実施、および、備蓄と設備の備えを関東地方の特別支援学校に対し促した³⁾。その結果、『特別支援学校用災害シミュレーションパッケージ』を活用していた学校の教職員は東日本大震災時に臨機応変な行動によって子どもたちの

Awareness of Natural Disaster Preparedness among Junior High School Students with Physical Disabilities : [2650]
From the Interview Survey for Children at 3 Special Support Schools 受付 14. 7. 8
Kafumi KOMURO, Reiko KATO, Chieko NUMAGUCHI, Shiho NISHIDA 採用 15. 8. 27

1) 東京医科大学医学部看護学科 (研究職 / 看護職)

2) 共立女子大学看護学部看護学科 (研究職 / 看護職)

3) 茨城県立医療大学保健医療学部看護学科 (研究職 / 看護職)

別刷請求先 : 小室佳文 東京医科大学医学部看護学科 〒160-8402 東京都新宿区新宿6-1-1

Tel : 03-3351-6141 Fax : 03-3351-3691

安全を確保し、保護者が子どもたちを迎えに来るまでの間は、備蓄していた飲食物やケア用品を用いることができた。このことは子どもたちとともに教職員にも安心をもたらした。東日本大震災時の検証の結果、災害に備えるための具体的なツールを教職員が活用することは災害の備えに有用であることへの示唆を得ている⁴⁾。

この『特別支援学校用災害シミュレーションパッケージ』は、教職員が子どもたちを守る立場で活用するツールであるが、障がいのある子どもと大人が災害の備えや情報提供ツールについて話し合う必要性が指摘されている¹⁾。すなわち、子ども自身が災害に備える意識を持ち備えることが重要であり、その方策を災害への備えの一つとして検討する必要がある。しかし、備えに関する、肢体不自由のある子ども自身の認識に関する先行研究はない。本研究では、未開分野の探索的研究に適する質的研究によって当事者である子どもたちが自然災害に備えることや発達段階に合わせた備えをどのように認識しているのかを明らかにする。なお、本研究における「災害への備え」とは、災害発生時の被害を最小にすることを目的とした取り組みである。時期を準備期から発生時、および、保護者に引き渡すまでとする。また、「子ども自身の災害への備え」とは、災害発生時に子ども自身の命や安全を守るため、教員・保護者とともに行う物品の準備、災害発生時の自身の取るべき行動と身体能力を高めることである。本研究では、災害に備える子どもの発達段階を幼児後期、小学校低学年、小学校高学年、中学生の四段階とし、「発達段階別の備え」とは各発達段階に合わせた備えのことであり、「段階的な備え」とは幼児後期から中学生までの発達段階の順序に沿った備えのこととする。

II. 研究方法

1. 対象

対象は、東日本大震災で震度6を経験した肢体不自由特別支援学校3校に通学する肢体不自由のある中学部生徒で、自分の考えや意見を述べられる者であり、学校の推薦後、研究協力に保護者と本人の同意の得られた者であった。対象者の推薦基準は「面接調査に回答できる認知レベルの中学部生徒」であった。3校で8人の推薦があったが、1人は内臓疾患による車いす使用者であったため、対象を7人とした。

2. データ収集方法

データ収集は、子どもの語りに応じた質問が可能である半構成的面接法を選択した。子どもの通学する学校の個室で、研究者3人が、それぞれ個別に子どもの面接を実施し、本人の了解を得てICレコーダーに録音した。子ども1人につき30分程度の面接であった。調査は、2011年11月に実施した。

3. 調査内容

面接の内容は、東日本大震災時の状況、および、子どもの段階的な災害の備えに関することであった。子どもが備えることに関する質問内容を表1に示す。

4. 分析方法

逐語録の災害の備えに関する発言をコード化し、サブカテゴリー、カテゴリーを抽出した。

5. 真実性の確保

小児看護を専門とし、特に特別支援学校に焦点を当てた災害の研究を継続している質的研究の研究者4人で、抽出されたカテゴリーの確認を行った。

III. 倫理的配慮

学校の推薦を得て、研究目的、方法、個人情報保護、自由意思による協力、協力辞退の権利、被災経験を語ることによる精神的苦痛への配慮、結果の公表を記載した保護者宛と本人宛の依頼書を郵送し、本人と保護者が同意し連絡のあった者を対象とした。面接時に、再度本人に口頭と書面で説明し、同意書の署名にて同

表1 子ども自身が災害に備えることに関する質問内容

- ・子ども自身が災害に備えることは必要と考えますか。
必要：その理由をお知らせください。
備えることが必要と考えられる内容をお知らせください。
必要ではない：その理由をお知らせください。
- ・子どもが幼稚園時代からこれまでの間、段階的に災害に備えることは必要と考えますか。
必要：必要と考えた理由は何ですか。
どういふことが必要と考えますか。考えられる範囲でお知らせください。
必要と考えた内容は備えることが可能でしょうか。
備えるためにはどのような方法が考えられますか。
必要ではない：必要ではないと考えた理由は何ですか。
- ・子どもが災害に備えるために、災害について教わることや、皆で考えること、備えるための練習をすることなどは必要と考えますか。
必要：その理由と内容をお知らせください。
必要ではない：その理由をお知らせください。

表2 生徒の概要

事例	年齢	性別	学年	診断名/ 障がいの状況	移動方法	居所
A	13	女	1	脳性麻痺/ 見守りが必要	車いす 歩行器 四つ這い	自宅
B	13	男	1	脳性麻痺/ 左麻痺	電動車いす	寄宿舎
C	13	女	1	脳性麻痺/ 下肢麻痺 移乗自立	車いす 歩行器	寄宿舎
D	13	男	2	脳性麻痺/ 下肢麻痺 移乗自立	車いす ずり這い	自宅
E	14	女	3	骨形成不全/ 不明	車いす 杖	医療型障害児入所 施設(学校に隣接)
F	14	女	3	不明	跛行	寄宿舎
G	15	女	3	二分脊椎/ 下肢麻痺	車いす 四つ這い	寄宿舎

意を得た。研究代表者の所属する大学倫理委員会の承認を得て実施した。

IV. 結 果

以下, [] はサブカテゴリー, 【 】 はカテゴリー, 「 」 は子どもの発言, () は著者による補足を示す。

1. 対象の概要

対象は中学部1年生3人, 2年生1人, 3年生3人であった。移動能は, 6人が学校で主として車いすを用い, 歩行には歩行器や杖を利用した介助が必要で,

家庭では四つ這いやずり這いであり, 残り1人は独歩で跛行を呈した。認知発達は, 全員が年齢相応であった(表2)。面接時間は29~50分であり平均41分であった。

中学部1年生の3人は, 東日本大震災の地震発生時は小学部卒業後の春休みであった。その他の生徒の居場所は, 帰宅準備中の教室, 学校に隣接する施設の自室, 学校の駐車場であった。金曜日であったため, 週末帰宅する寄宿舎生は家族が迎えに来る時間帯であった。被災状況を表3に示す。

2. 災害に備えることに関する認識

災害に備えることに関する認識として3カテゴリーが抽出された(表4)。

1) 自分で物品を備えることの必要性

「自分でも備えてないと, 親戚の人が今回いたからいいんですけど, もし親戚の人も準備とか全然なくて物とかいろいろ困った時に自分で準備していれば, 周りも救えるかな。」と【自分で物品を備えることの必要性】を認識していた。

2) 備えに必要な物品

「備えることによって, 予知しなくても, 食料とか水とかあったら, 多分, 何日間か, 1日2日しかもたないと思うけど, 空腹は満たせると思います。」という〔空腹を満たす食料や水〕, 「うちにはラジオがあったので, 的確な情報が得られたので, ラジオとか必要だと思います。」という〔的確な情報を得るラジオ〕, 「……(トイレを) 介助されている人はそういうのないと大変だったり, ……必要だなんて。」という〔トイレ介助を受ける人の必要物品〕, 「……普段の荷物も全

表3 東日本大震災時の生徒の経験(地震発生は金曜日)

事例	地震発生時の居場所→発生後の行動	被災状況	
A	ダイケア施設 →迎えて帰宅し自宅庭で過ごす	自宅の電気・水道が停止	自宅建物の被害はなし
B	母親と友人宅 →帰宅し車に待機		自宅瓦が落ち, 室内に物が散乱
C	友人宅 →帰宅		自宅瓦が落ち, 割れたガラス・食器が散乱
D	教員2人と教室 →学校に待機後, 19時ごろ家族の迎えて帰宅		自宅室内に物が散乱, 車内で2日間過ごす
E	学校隣の施設 →学校に待機後, 17時ごろ家族の迎えて帰宅		自宅は日中家族不在のため, 祖父宅で2週間弱過ごす
F	学校の駐車場 →迎えに来ていた祖父と祖父宅に帰宅	自宅の電気が停止	自宅室内に壊れた物が散乱, 2日間日中は車内で過ごす
G	教室 →通常通りの家族の迎えて帰宅	自宅の電気が停止	

表4 災害の備えに関する子どもの認識

	カテゴリー	サブカテゴリー
災害に備えることに関する認識	自分で物品を備えることの必要性	自分で物品を備えることの必要性
	備えに必要な物品	空腹を満たす食料や水
		的確な情報を得るラジオ
		トイレ介助を受ける人の必要物品
		持ち出し用の荷物
		カイロや懐中電灯
	避難に備え必要なこと	大災害に対応した避難方法
		訓練通りの行動
		避難中に身を守る方法 避難後にとるべき自分の行動を知る
	発達段階別の災害への備えに対する認識	自己の年齢相応の備え
寄宿舎における年齢相応の行動の自覚		
年齢相応の方法で慣れる		年少児は防災グッズをいつも身近に置く
		大きい子どもは災害時の動きに慣れておく
段階的な備え		段階的な備えは必要
		理由はわからないが段階的な備えは必要
		幼児後期から段階的な備えを始める
		成長する自分に合う防災の学び
		備える能力が身につく行動できる

部そこに置いてあったんで、もう、逃げてからは戻れないって。(持っていきたくないとか)っていうのは結構ありましたね。(そういうのを持っていけるように何か準備しとくとか?)そうですね。」という〔持ち出し用の荷物〕、「今回、あんなにおっきい地震を体験して、カイロがなかったり、これがないなあと思ったり、懐中電灯もなかったんで、備えたり。避難する時も、あったほうがいいなと思った物もあったので、備えたほうがいいなと思いました。」という〔カイロや懐中電灯〕のような【備えに必要な物品】を認識していた。

3) 避難に備え必要なこと

「今、避難訓練でやる基本的なところは普段からできる。結構言われても、ああいうおっきいになると、できなくなるというのがあったと思うんで、そういうのをちゃんと練習しとくべきだったとは思いますがね。焦ったりとかして。」「地震が起きた時、どんなふうに行動するのかっていうことをやりたいです。学校でやるので大丈夫ですけど、こういう大きな地震が来た時、ちょっと、苦戦するかも。」という〔大災害に対応した避難方法〕、「避難の練習? 当たり前のことですけど、戻らない、焦らないでっていうぐらいですけど、焦っちゃうと、つまずいちゃったり。避難訓練でできていることも、実際なっちゃうとできなくなったと

いうのは、あったかなあ。」「避難訓練って言っても、たまあにっていうくらいで、わかってるつもり、わかってたけどできなかったのが結構あるので、もうちょっとやったらよかったかなあって思います。」という〔訓練通りの行動〕、「避難訓練って言っても、その場所に移動するまでは、結構、練習はするんですけど、電気の下を避けるとか、頭を守るとか、そういうのはあんまりしないですね。地震の時に、テーブルの下に隠れるとかで終わってるって感じがしますね。」という〔避難中に身を守る方法〕、「とりあえず、みんな集まってって言われたんですけど、そこから自分でどうするか知ってた方がよかったかなあって思いますね。」という〔避難後にとるべき自分の行動を知る〕から、【避難に備え必要なこと】が抽出された。

3. 発達段階別の災害への備えに対する認識

発達段階別の災害への備えに対する認識として、3カテゴリーが抽出された(表4)。

1) 自己の年齢相応の備え

「例えば、…教わりたいこと…いろいろ災害があった時に…大人だったらどういう対処をするか、やっぱりこういう年齢になったらどういうことをしなきゃいけないとか、を習いたいです。」という〔年齢相応の知識を学ぶ〕、「寄宿舎は、障がい重い子とか小学校低学年の子もいるので、低学年の面倒も見つつ、自分の身も守りつつ、先生の言うことを聞いてれば、先生がいっぱいいるから。」という〔寄宿舎における年齢相応の行動の自覚〕から、【自己の年齢相応の備え】が抽出された。

2) 年齢相応の方法で慣れる

「小さいうちは好奇心が旺盛なので、防災グッズだけどもちゃみたいに扱って身近にいつも置いておくとか、使い方をその遊びと同じく教える。」という〔年少児は防災グッズをいつも身近に置く〕や、「大きくなってくるとある程度、地震っていうのは何なのか、そういうことがわかる。地震とか、水害とか、どういふことなのか、災害というものが多分わかると思うので、どう動くのかって……やっぱり慣れておくことが必要だと思います。」という〔大きい子どもは災害時の動きに慣れておく〕から、【年齢相応の方法で慣れる】が抽出された。

3) 段階的な備え

「(段階的に) 違った方が。たぶん、違った方がいい

表5 発達段階別の備えの内容

	カテゴリー	サブカテゴリー
幼児後期	指示に従う	指示に従う
	対処方法を教わる	頭を守ることを教わる
		水を買う方法を教わる
まわりが備える	まわりが備える	
小学校低学年	少しずつ自分で備える	少しずつ自分で備える
	命を優先する	命を優先する
小学校高学年	自分で備え自分で守る	必要物品を用意し自分で持つ
		自分の身を自分で守る
中学生	正確な知識を持つ	ニュースの情報を知る
		災害の発生する仕組みを知る

かなと。」「妹（6歳）にそういうふうに教えたいですね。兄として、教えたいですね。ほんとに。」という〔段階的な備えは必要〕、「必要だとは思いますが、その理由がちょっとわかんないですね。」という〔理由はわからないが段階的な備えは必要〕、「……幼稚園生くらいからかなあ。4歳くらいから。」「幼稚園くらいから。自分でできないこととかも多いと思う。その人に合わせてだと思わすけど……。」という〔幼児後期から段階的な備えを始める〕、「大きくなるうちに、実際に、震災があったこととか学んで、成長していく自分に合った、防災のなんか必要だと思います。」という〔成長する自分に合う防災の学び〕、また、「避難訓練は必要ですし、備える能力も身につくと思うし、あとは、備えられるための能力、が大切だと思います。」「（備える能力とは）食べ物を用意したり、すぐ行動に移れるように、いつでも、日常的にすぐ行動したりすることですかね。」や、「すぐ、机の下とかに頭隠せたり、タオル、帽子かぶれることは大事だと思います。」「どこに避難したらいいとかか。」という〔備える能力が身につく行動できる〕から、【段階的な備え】が抽出された。

4. 発達段階別の備えの内容

発達段階別の備えの内容は、7カテゴリーが抽出された（表5）。

1) 幼児後期

幼児後期は、「幼稚園の頃はとにかく、逃げる場所もそうですが、親以外にも他の人の言うこと、指示に従ったりする。するといいこととか。」という、子

ども自身は【指示に従う】であり、周囲の関わり方として「幼稚園児に覚えさせたいことは、頭を守る、ですかね。」という〔頭を守ることを教わる〕や「・・・水が出ない時は、スーパーに行って買うんだよとか、教えたいですね。」という〔水を買う方法を教わる〕という【対処方法を教わる】が抽出された。また、「幼稚園の時は自分自身がわからないので、まわりが……。」という【まわりが備える】が抽出された。

2) 小学校低学年

小学校低学年は、「ちょっとずつ、自分で備えることができるようになっていったらいいと思います。」という【少しずつ自分で備える】、「…例えば靴は履きかえないで逃げるとか、命を優先にするとか……。」という【命を優先する】が抽出された。

3) 小学校高学年

小学校高学年は、「自分の食料は自分で持つ、自分の身はそれこそ自分で守る。帽子かぶったり、靴はいたり、危険な場所には行かない。」「…高学年になれば、その災害の時のグッズを揃えてみたり……。」から〔必要物品を用意し自分で持つ〕、〔自分の身を自分で守る〕という【自分で備え自分で守る】が抽出された。

4) 中学生

中学生は、「ニュースで情報を、いろんな情報を中学部みんなに知ってほしいと思います。どこどこで地震が起きるかもしれないって。」という〔ニュースの情報を知る〕、「…どういふふうに津波は来るか、地震とはどうなっているから、段々に大きくなっていくのか、縦揺れ、横揺れをちゃんと頭に入れておくと、縦揺れだから早く逃げなきゃいけない、横揺れだから少しの猶予がある…最初の段階でこの揺れはおっきい地震になるか、そこまでは実際冷静になれるかわからないんですけど、できればそういうふうに冷静を考えて、逃げる場所、地震の後もこれだけ大きいから津波が来るとか、中学生にもなれば、そういうことを考えられればいいと思いました。」という〔災害の発生する仕組みを知る〕から、【正確な知識を持つ】が抽出された。

5. 備えを身につける方法

備えを身につける方法は、発達段階別としては述べられなかったが、学校と家庭で身につける方法の4カテゴリーが抽出された。学校では、「日ごろから言ったり、体験してちょっと聞くでも違うと思います。」

という〔日ごろから体験〕、「今回津波とか被害が大きかったので、地震だけじゃなくて津波が来たっていうの、実際にそういうことを予想しなくても、地震が来た時に逃げるルートをみんなで歩いてみる、そういう練習ができた、したらいいと思います。」という〔『想定外』を設定した避難訓練〕、「ビデオが効果があると思います。例えば、誰も乗っていない車いすで危険な箇所に行って、こうなると危ない、そういうビデオ見たほうが衝撃があるのでいいと思います。小学校低学年の子もわかりやすいし、高学年でも再度確認できるから。」という〔視聴覚教材で体験〕から【日ごろから多様な体験をする】、また、「友だちの意見聞いたりすると、自分で気がつかなかったことを友だちは気がつくので、いいと思います。」「先生と話したことも、友だちと話したり。」という【友だちや先生と話し合う】が抽出された。さらに、「私たちみたいな人は教科クラスって普通のクラスですけど、たぶんその人たちはパンフレットだけでいいと思います。体験さん、自立さんって、介助がいたり、ちょっとしゃべるのが聞こえない、よくわからない子っていうのはパンフレットより実際やった方が覚えると思います。」と【障がいの重さや種類により方法が異なる】ことを述べていた。

家庭では「親、まわりのおじいちゃん、おばあちゃん。」「…家でも、親とかに教えてもらえたりできたらいいと思います。」という【家族に教わる】であった。

V. 考 察

1. 災害に備えることに関する子どもの認識

1) 子ども自身が災害に備えること

子どもたちは、東日本大震災の経験に基づき、災害に自分でも備える必要があると認識していた。その内容は、食料、ラジオ、カイロ、懐中電灯など災害時に必要な物であったが、〔トイレ介助を受ける人の必要物品〕のように、障がいのある子どもにとって重要な必要物品があることも認識していた。従って、子どもとともに、災害時の必要物品について、①リストアップ、②学校や家庭での保管方法、③使用方法、④避難時の持ち出し方法、⑤定期的な点検、を検討することは、子どもたちの災害に備える能力を高めるとともに安心をもたらすと考える。

また、子どもたちは大災害に備えることについて、避難時は自分が訓練通りに動ける必要を述べ、避難の

際に身を守る方法や、自分がかかるべき行動を知る必要を述べていた。肢体不自由のある子どもの避難に対しては、その障がいの特徴や車いすや杖を使用する必要などから避難行動に関して課題が多くある⁵⁾と考えられるが、子ども自身が身を守る方法や避難後にとるべき行動を知っておくことは、大人による保護を待つのみで何もしないよりも、被害が小さくなる可能性がある。また、子どもが自ら行うことは、自分のできる力を子どもが認識することにつながり、肯定的自己概念の形成にも影響すると考えられ、災害時の子ども自身の安定につながる可能性がある。

2) 子どもが発達段階別に災害に備えること

子どもたちは、子どもが発達段階別に災害に備えることは必要であり、備えは幼児後期から始めると述べていた。また、〔成長する自分に合う防災の学び〕があり〔備える能力が身につく行動できる〕ことを認識していた。これは、自分たちが成長する存在であり、成長に伴い能力が高まる存在であると認識していることによる意見だと考えられる。さらに、自分のすべきことは、年齢相応の知識と行動を学ぶことや行動することであると認識し、そのために年齢相応の方法を用いて備えに慣れる必要があることを認識していた。発達段階各期における備えは、守られる立場から自立へ向かう内容であった。それは、幼児後期の子どもの備えは主として周囲が備え、子どもは周囲から指示や教養を受けるが、学童期の子どもは徐々に自分で備え自分で守ることに変化し、中学生の時期には正確な知識を持つことであった。このように、子どもたちには自分たちの発達段階に応じた知識と行動を身につけることへの具体的なニーズがあることが明らかとなった。

子どもの発達段階に沿ったセルフケアスキルの獲得に関しては、健康障害のある子どもたちの健康管理に関する発達支援のガイドラインがある⁶⁾。これには、子どもの発達課題の達成を目指すとともに、健康管理に必要なセルフケアの発達に関連するさまざまなスキルを身につけるための親と子どもの詳細な目標が設定されている。障がいのある子どもが災害に備える能力に関して、各発達段階に応じた能力を特定し、その能力を身につけることを支援する何らかのツールやガイドラインが必要と考えられる。

2. 子どもが災害の備えを身につける方法

子どもたちは日ごろから体験する必要があることや、想定外を設定した訓練や視聴覚教材の活用を述べていた。また、友人や教員と話し合うことで自分の不足が補完されるという意見もあった。子どもは、あらゆる災害に関する感情を共有し疑問への回答を得ることへのニーズがあるということからも¹⁾、話し合うことは重要である。話し合うことは想定外に対する不安への対応としても必要な方法であると言える。また、情報は子どもたちが詳細を正確に理解することを保証するために繰り返し提供される必要がある¹⁾ため、繰り返し場を設定することも必要である。

一方で、【障がいの重さや種類により方法が異なる】において、「私たちみたいな人は…普通のクラスですけど、…パンフレットだけでいいと思います…」という、自分たちに体験は不要という意見があった。自己の能力を高く評価している子どもは、災害時に不便に感じたことがあっても、体験する訓練は不要と考える場合があることも明らかとなった。周囲の大人は、子どもたちが自己の身体機能や周囲の環境をどのように認知しているかを確認しながら適切な方法を検討する必要がある。

また、子どもたちは家族からも教わる必要があると認識していた。学校だけでなく、子どもの行動範囲を網羅した備えの必要がある。親が備えることへの介入⁷⁾だけでなく、親が子どもへ教育することへも視野を広げ、障がいの状態や移動方法に適した子どもへの働きかけ方を検討し、家庭、学校、通学時や受診時などのいずれの生活の場においても備えることができるようにする必要がある。海外においても親、医療関係者、学校関係者、地域機関が連携する必要があると指摘されており^{1,8)}、連携した子どもへの関わりは今後の課題と言える。

3. 本研究の限界

本研究は、特別支援学校3校に限定した結果であることに限界がある。また、他の障がいのある子どもの災害の備えや、一般校に通学する障がいのある子どもの備えを検討することが今後の課題である。

本研究の一部は、第32回日本看護科学学会学術集会(東京)で報告した。本研究は、科学研究費助成事業学術研究助成基金助成金(基盤研究(C) 研究課題番号23593328「肢体不自由児が災害の備えへのセルフケア能力を高めるためのパッケージ開発」(研究代表者:加藤令子))の一部である。

本研究は、利益相反に関する開示事項はありません。

文 献

- 1) John S Murray. Disaster preparedness for children with special healthcare needs and disabilities. *Journals for Specialists in Pediatric Nursing* 2011; 16: 226-232.
- 2) 小林芳文, 飯村敦子. 特別支援学校等における災害時の避難. *日本生活支援工学会誌* 2007; 7 (2): 2-11.
- 3) 加藤令子, 小室佳文, 沼口知恵子. 特別支援学校における災害対策—『特別支援学校用災害シミュレーションパッケージ』の開発と活用効果—. *小児看護* 2011; 34 (2): 224-228.
- 4) 小室佳文, 沼口知恵子, 加藤令子. 『特別支援学校用災害シミュレーションパッケージ「茨城モデル」』を活用した災害の備え. *茨城県立医療大学地域貢献研究平成22・23年度報告書*, 2012.
- 5) 丹羽 登. 東日本大震災等による特別支援教育面の困難・問題点と今後に向けての教訓. *リハビリテーション研究* 2011; 149: 19-23.
- 6) Cecily L Betz. California Healthy And Ready To Work Transition Health Care Guide: Developmental Guidelines for Teaching Health Care Self-Care Skills to Children. *Issues in Comprehensive Pediatric Nursing* 2000; 23: 203-244.
- 7) Baker MD, Baker LR, Flagg LA. Preparing Families of Children With Special Health Care Needs for Disasters: An Education Intervention. *Social Work in Health Care* 2012; 51: 417-429.
- 8) Catherine JG, Ann CL, Rita VB, et al. Consider the children: Pediatric disaster planning. *Nursing management* 2013; 44 (11): 44-51.

[Summary]

Aim : This study aimed to elucidate the awareness of natural disaster preparedness among Junior High School students with physical disabilities at 3 special support schools.

Method : The research design implemented for this study was a qualitative design. Data were collected from 7 students using semi-structured interviews, and the data transcribed verbatim were analyzed following the contents of the interview guide.

Results : The students were aware of the need to make one's own preparations at each developmental stage. They were also aware that they should begin at the preschool stage. Their awareness included the concept that children with physical disabilities must transition from being a cared for person at the preschool

stage to an independent person at the Junior High School stage.

Conclusion : It is necessary for parents and teachers to be aware of the needs of children with physical disabilities to acquire abilities to prepare for natural disasters. There is also a need to cooperate with the relevant organizations in ensuring adequate preparations during their commute, hospital visits, and other situations outside of school and the home.

[Key words]

awareness of children,
children with physical disabilities,
junior high school students,
preparations for natural disaster,
special support school